

Foreword

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2004-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 馬場, 優子 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/3750

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



巻 頭 言

馬 場 優 子

先日、ゼミで学生が「最近友達同士のような親子が増えているが、これは親が親としての責務を放棄していることの表れではないだろうか」というような発言をした。現代の二十歳前後の学生といえば「親」ではなく「子」の立場に身を置いてものを考えている。この意見は子どもの側からの発言として強く印象に残った。

公の場でよく見かける、若い娘と並んで同じレベルで世間話に夢中になっている中・熟年の母親、4、5歳の娘に駄々をこねられ、次いで愚弄されている父親、7、8歳の息子とタメ語でしゃべっている母親、中・高校生の息子の言いなりになり、大人としての見識を示せない父親や母親等々、最近親子間の言葉を介したコミュニケーションには年齢差も世代差も社会的地位の違いも感じられなくなってきた。これは親子間の上下関係や序列の稀薄化、一言で言えば平等化であるとして歓迎すべきことなのだろうか。

産業化以降の現代社会では子どもの主要な社会化の場は核家族である。子どもは生れ落ちた家族の中で保護・養育され、学習モデルを見つけて生育していく。この「近代家族」は小規模できわめて単純な構成の、外に向かっては閉鎖的でコンパクトな集団である。大家族と比較すれば構成が単純ではあるが、複数の人間から成るひとつのシステムであり、その中で各人は地位に応じたそれぞれの役割や立場を持つ。子どもは学ぶ立場にあり、親は学ばせる、あるいは学習モデルとなる、というように異なる地位、役割を担っているのだ。そのようにして一世代から次世代へと(最新の技術を除いて)文化・伝統が継承されてゆくのだということを相互に認識しなくてはならない。

親子間の地位・役割の差異の曖昧化現象はむしろその深層に隠された病理を隠蔽するものではないかという危惧を抱かせる。

小さな密室である「近代家族」においては無意識界の内容も世代継承されてゆく。たとえばユング心理学は、親自身が成長過程の各段階で発達課題を遂行しないまま成人し、外見のみ辻褃を合わせた人生を送ってきた結果、親

が無意識界に注意深く隠している葛藤を同一視によって子どもに感じ取られ、子どもが無意識に感じ取った漠然とした不安や恐怖を心の中に育ててしまった事例を数多く分析している。また、レイン等も、家族メンバー間の力動的な二者関係、三者関係の集積であるネットワークの中で、成熟できていない親が集団としての家族の防衛のために無意識的に scapegoat として選んだ最も弱い子どもが精神に混乱を生ずる事例を多くあげている。これらの場合、子どもは親の人生を生きてしまう。逆に言えば、親が子どもを通して子どもの人生を生きてしまい、子どもの内的世界を破壊することになる。そしてそれは世代継承的に繰り返されてゆくのである。

「近代家族」に現れるこうしたさまざまな社会病理現象を見るにつけ、人類学者は前近代社会に思いを馳せる。ここではアフリカ、アジア、オセアニア、北アメリカなどに非常に広範に分布している冗談関係 (joking relationship) について述べたい。

これは揶揄、嘲笑、愚弄あるいは茶化したりする行動があるカテゴリーの人々あるいは集団との間で容認、もしくは(社会によっては)強要されている制度を意味する。この侮辱に対して怒りをもって反応してはならない。非対称的な関係においてはさり気なく受け流し、対称的な関係では相互にその行為を行う。

この慣習の意味・機能について社会人類学は、構造的に社会的接合と社会的分離と言う二つの要素を同時にはらんでいる関係におかれた個人もしくは集団が安定した秩序ある社会生活を維持するための行動であると解釈している。社会的分離の側面では利害関係の分裂が存在し、潜在的に緊張、葛藤、衝突あるいは敵意、敵対といった関係を含む。しかし社会的接合という構造的要素をもつ関係においては衝突や闘争は顕在化させてはならない。こうした関係にある場合にとるひとつの行動類型が儀礼化された“無礼”なのである。深刻な敵対感情も冗談や戯れによって緩和されるからである。

もうひとつの方法が「忌避」である。相互に放縦や無礼は許されず、距離をおいた接触をし(完全に接触を避けねばならない社会もある)、非対称的な関係では一方が他方に対して敬意をもって接する。この種の堅苦しい関係を「忌避関係」(avoidance relationship)と称する。この二つ、つまり儀礼化された「無礼」と「敬意」は一組の慣習として観察されることが多いが、どのようなカテゴリーの人々が冗談関係と忌避関係それぞれの対象となってい

るのだろうか。

非常に広範に見出される原則は、冗談関係は本人と同世代の親族（兄弟姉妹やイトコなど）および二世代上の親族（祖父母およびその世代の親族）との間に、忌避関係は一世代上の親族（父、母およびその世代の親族）との間に樹立されているというものである。親子の間を特徴付けるのは親が優位の非対称的な忌避関係であるといってよい。文化や伝統はある世代から隣接下位世代へ継承されて社会が存続してゆくが、その場合、背後に一定の権威を備えた地位にある者が子どもへの継授という役割を担うことに効果がある、ということであろう。このことは親子間の地位や役割の不分明は前産業社会では社会の存続と言う観点から適合的ではないことを示唆している。

現代日本では「友達親子」を理想的であると考えられる傾向が強いのかどうか判断する資料は持ち合わせていないが、少なくともある割合の人々にとってそれは望ましいことのようなのである。しかしそれは人類が生存戦略として“家族”を創造してきた歴史の中では軌道のずれのように思われるのだが。それともそう思うこと自体、筆者の世代間 *discommunication* の露呈であろうか。